

聖書：第二サムエル記 1章 1～16節

説教：主に油注がれた方に手を下す

1 アマレク人の若者からの報告

1) サウルの死

今日からしばらく第二サムエル記を見ていきます。内容に入る前に、背景を少しだけ確認していきます。

時代は、紀元前 1000 年頃です。イスラエルは、サウルが初代の王様に立てられ一つの国として出発したばかりです。そんな訳ですから、国としての力はまだ弱く、周りの民族とのいさか이가絶えません。そんななか、敵であるペリシテ人が総力を挙げてイスラエルに攻め込もうとしてきます。サウルは戦いの最前線に立ち、息子であったヨナタンとともに戦場で倒れてしまいます。そのことが、今日の箇所背景になっています。

では、サムエル記の主人公であるダビデはこのとき、何をしていたのか。彼はもともとサウルの部下でしたが、次第にサウルからいのちを狙われるようになり、思いあぐねた末、敵であったペリシテ人の地に家族を連れて亡命していました。そんなときにイスラエルとペリシテ人との戦いが起きてしまいます。不思議な成り行きで戦争に巻き込まれずに済みましたが、祖国イスラエルがどうなるのか心配だったはずですが、でも何もできません。ただ、黙ってことの成り行きを見守るしかありません。

そんなとき、ダビデのところに一人のアマレク人がやって来てこう報告しました。4節後半。「民は戦場から逃げ、また民の多くは倒れて死に、サウルも、その子ヨナタンも死にました。」

2) 嘆き悲しむダビデ

これを聞いたダビデはどうしたか。12節にこうあります「サウルのため、その子ヨナタンのため、また、主の民のため、イスラエルの家のためにいたみ悲しんでなき、夕方まで断食した。彼らが剣に倒れたからである。」

私はこの箇所を初めて読んだとき、非常にとまどいました。というのは、ダビデはサウルからずっとひどい目に遭わされていたからです。家や財産、名誉も剥奪され、今や犯罪者扱いです。友人に裏切られ、国を追われていきました。もちろんダビデには、何の落ち度もありません。ダビデはサウルに忠実に従っていただけでした。すべての責任は、ダビデを嫉妬したサウルにあります。

そのサウルが死んだという知らせを聞きました。普通はどんなことを思いますか。ダビデは、心の底からサウルの死を喜ぶに違いない。そのように予想しました。ところがどうですか。ダビデはサウルの死を嘆きます。加えて、サウルの死を報告したアマレク人の若者を打ち殺すように命じるのです。読んでいて、めまいがしてしまいました。

2 厳しい処罰を受けた理由

1) 嘘の証言をした

ダビデがどうしてこのような厳しいことをしたのか。調べていくと、確かに二つの理由がありました。

一つ目の理由は、このアマレク人の若者が嘘の報告したからです。きっかけはこの質問

です。5 節。「サウルとその子ヨナタンが死んだことを、どうして知ったのか。」これに対し、若者は自分がたまたまサウルのそばを通りかかり、サウルの依頼で死ぬのを手伝ったのだと説明します。

事実はどうだったのか。第一サムエル記 31 章 4, 5 節にあります。瀕死の重傷を負ったサウルはそばにいた道具持ちに自分を殺してくれと頼むのですが、道具持ちは非常に恐れてとてもそんなことはできないと断りました。そこでサウルは自分の剣に倒れて死にます。これが事実です。あの若者の話と比べてみてください。若者が嘘をついているのは明らかです。でも、ダビデは現場にはいません。どうやって嘘を見抜くことができたのでしょうか。

彼がアマレク人であったことが重要な鍵となっています。時代をさかのぼることモーセの時代、イスラエルがエジプトから脱出したときのことです。アマレク人が、荒野を旅するイスラエルを容赦なく襲うということがありました。神は、そのことを何百年経っても忘れず、アマレク人を徹底的に罰するようにと命じていたのです。

このことを頭に入れながら、8, 9 節をよんでみましょう。「サウルは私に、『お前はだれだ』言いましたので、『私はアマレク人です』と答えますと、サウルが、『さあ、近寄って、私を殺してくれ』と言いました。」

イスラエルの先祖からの敵であるアマレク人に、サウルが自分を殺してくれと頼むのでしょうか。たとえどんなにサウルの信仰があやふやであったとしても、絶対にありえません。ダビデは、これは嘘であると見抜きました。

映画やテレビで戦国時代を扱ったドラマ

を見ていると、ときどき、今日のような場面が登場します。下っ端の兵隊が、敵の大將の首を差し出し、「これは立派な手柄である。褒美をつかわす」と言われ、お金をもらったり、あるいは部下に召し抱えられていきます。このアマレク人の若者は、おそらく褒美をもらうことをたくらんで、こんな嘘をついたのだろうと推測されます。ダビデは誤魔化されません。真実を見抜きます。ダビデが激しい態度を取った理由の一つ目です。

2) 主に油注がれた方を殺した

とは言え、この若者を弁護する余地がないわけではありません。彼の証言のほとんどが嘘だったとしても、サウルが死んだことは嘘ではありません。事実です。ダビデにとっては良い知らせのはずです。若者を殺すのは行き過ぎに見えます。せいぜい鞭で打ちたたいて追い返せばよいはずです。なぜこのような厳しい態度を取るのか、ダビデはこのように説明しています。14 節。「主に油注がれた方に、手を下して恐れなかったとは、どうしたことか。」

なぜダビデはこだわるのでしょうか。ダビデがサウルから追われていたときのことです。ダビデにもなんとかサウルを殺すチャンスが舞い込んだことがあります。ダビデは、憎いサウルを殺したい思いで一杯です。けれども彼はからだをふるわせながら、自分を抑え、部下に対してサウルに手を出さないようにと命じました。理由はこうです。「主に油注がれた方に手を下すことなど絶対にできない。」

サウルを殺したいという思いと戦いながら、いつもぎりぎりの所で、自分を抑えてきました。そんなふうにして、絶対に越えては

ならない一線があることを、いのちをかけながら学んでいきました。たとえ自分が殺されることになったとしても、油注がれた者を殺す事はできないのです。

なぜそこまでこだわるのでしょうか。このことを象徴することばがあります。第一サムエル記2章10節後半。ハンナの祈りとして知らせる箇所のことば。「主は地の果て果てまでさばき、ご自分の王に力を授け、主に油注がれた者の角を高く上げられます。」この祈りの後にハンナはサムエルを産み、そのサムエルがサウルに油を注ぎ、ダビデに油を注ぐこととなります。一度油を注がれた以上、何があってもその事実を取り消されることはありません。たとえサウルがイスラエルの王としてまったくふさわしくないことがわかっていても。神は、サウルを王に任命したことを後悔するのですが、それでも油を注いだという事実を取り消しません。それほど大切なことなのです。ダビデは、それを知っています。神でさえ油注がれた者に手を下さない。もし油注がれ者が、人の手で殺されたなら、その者は死ななければならない。それがダビデの信仰でした。

この若者が厳しい処罰を受けた理由の二つ目がここにあります。

3 油注がれた主イエス・キリスト

このことは私たちにとってどんな関係があるのでしょうか。主イエス・キリストを思い浮かべてください。この方は、主に油を注がれたイスラエルの王です。その方がどうなりましたか。十字架で殺されました。油注がれた方を殺した者はどんな報いを受けるのでしょうか。ダビデはこう言っています。16節。「おまえの血は、おまえの頭にふりかか

れ。おまえ自身の口で、『私は主に油注がれた方を殺した』と言って証言したからである。」こう言われて、アマレク人の若者は打ち殺されました。

いったい誰が、主を十字架で殺したのでしょうか。自分以外の他の人たちですか。いいえ、私たちが油注がれた方を殺しました。このままでは、あのアマレク人の若者と同じ処罰を受けなければなりません。逃れの道はないのでしょうか。

あります。ダビデは先ほどのことばを、さばきのことばとして語りました。でも、主はダビデのことばをこんどは恵みのことばに百八十度変えてくださったのです。

どういうことか。私たちは主の前で告白します。「私は主に油注がれた方を殺しました。」そうすると主は、ご自分の血を私たちのために流してください。主の血は私たちの罪を洗いきよめていきます。さばきの血ではなく、恵みの血が私たちの頭に降りかかっているのです。主は私たちの身代わりとなって死んでくださいました。主を信じる者はさばかれることは絶対にありません。本当でしょうか。どうしてそんなことが言えるのか。

ダビデは何を信じていましたか。主に油注がれた者を絶対に殺す事はできない。そう信じていました。では、私たちはいまだどんな身分におかれていますか。今言いました。主が流された血によって、油を注がれた者とされています。一度、油注がれた者となった以上、どんなことがあろうともその事実は取り消されません。それは神でもできないことです。

厳しい処罰をするダビデの姿から、神の救いの確かさが浮かび上がってきます。